

最優秀賞

日本放送協会横浜放送局長賞

もやははらえば

三浦市立三崎中学校

三年 木村 愛美

私は、父が嫌いだった。

父は私が二歳の頃クモ膜下出血で倒れた。一命はとりとめたもののだんだん幻聴や幻覚などの症状が出はじめ、心配した母が父を病院へ連れて行くと脳血管性認知症であることがわかった。それからは家族で父を介護しながら生活していたが、家族全体の負担は肉体的にも精神的にも大きかった。

それなのに父はよく笑う。テレビを見る時、ご飯を食べる時、拙い喋りで自慢話をする時。私はそれが嫌だった。父のことで骨身を削っている私達よりも父が楽しそうにしていることに腹が立った。

私が小さい頃、ご飯をこぼしたら母にすごく怒られた。でも父がご飯をこぼしても母は怒らなかつた。私が、「どうしてお父さんには怒らないの」と聞くと、母はこう言った。「お父さんはいいの。仕方ないのよ。」

その時の私は、その言葉の意味をよく理解できていなかった。だから特別扱いのようにされる父を、私は羨ましく思った。

私は父のせいで家に友達を呼べなかつたし、夜に徘徊している時もあったので満足に寝られない日もあった。父さえいなければ、と思ってしまうことが何度もあった。

だから私は、父に反抗を始めた。小学校高学年あたりからケンカが多くなり、お互い手を出したこともあった。力で勝てないと知っていた私は、友達に父の悪口をおもしろおかしく話して笑った。

それからだんだん父の症状が悪化したので父が精神科の病院に入院することになった。正直、清々すると思つた。これでみんなも楽になるだろう、と思つていた。

父が入院し、トラブルは減つた。でも笑いながらテレビを見る父がいなリビングは少し寂しく見えた。父がいなくなつて、物足りなさを感じてしまうのもまた事実だった。

それからしばらくして、母と一緒に病院まで父の様子を見に行くことにした。週に一度は父の様子を見に行っている母の話では、父は家にいた時よりずっと静かでおとなしくなっているらしい。自己主張の強い父が静かになつていてなんて想像できなかったので、少し気になった。

父は自分の病室を出てすぐのラウンジにいた。そこで久々に父の顔を見た私は、思わず驚いてしまった。

父は私が今までに見たことのない、悲しいような、苦しいような顔をしていた。そして父が口を開いたかと思うと、とても弱々しい声で「家に帰りたい」と言うのだ。いつも我が強く、しかし明るかった父と、今目の前にいる父を交互に見つめ直した私は、その場で号泣していた。父には怒らない母、そしてよく笑って楽しそうな父。そんな姿を思い出して、今私はなぜ泣いているのか少しだけ分かった気がした。そして思った。自分が一番嫌な奴だったじゃないか、と。

それからまたしばらくして、症状が安定した父が帰って来ることになった。父が帰って来てからもやっぱり口論になることはあったが、あれから大きく変わった事がある。それは、私はもう父を嫌いだと思わなくなったこと。それに父の悪口を言うこともやめたし、何より父と一緒にふざけたり笑ったりできるようになったことだ。

障害のある人も私達と同じで、悪口を言われれば傷つくし私達が笑顔でいれば安心してくれる。こんなに小さな出来事で私は変わることができたし、家族全体まで明るくなったように思える。

多くの人に、障害というもやの先、その人の本質を見ようとしてほしい。そしてもっと多くの人が少しでも笑顔に、幸せになれることを心から願っている。